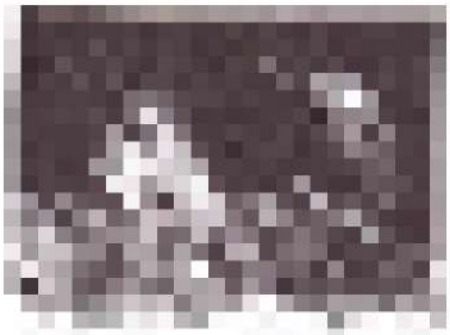

Concert クルレンツィスがフィルハーモニア・チューリヒのコンサートに登場

音楽監督のファビオ・ルイジとスペイン・ツアーから帰って来たばかりのフィルハーモニア・チューリッヒが、ツアーと同じくエレーヌ・グリモーのソロで、今度はテオドール・クルレンツィスをゲスト指揮者に迎えた公演を行った（1月25日）。スイス人作曲家ディーター・アンマンの《グルート》で始まるこのプログラムは、作曲家自身もクルレンツィスに振ってもらえることを喜んでいたが、練習中に譜面を十分に読み込む時間が取

カーテン・コールでのクルレンツィス ©中 東生

れず、この曲のみ、この楽団代表を務める打楽器奏者兼指揮者のハンス・ペーター・アッハベルガーが暗譜で振り、素晴らしい一体感を見せた。

グリモーは曲想に合わせてか、まさか指揮者の髪の色に合わせているのか、10日前には銀色だった髪をチョコレート色に染めて登場した。楽しそうに見つめ合いながら始まったラヴェル「ピアノ協奏曲」ト長調は、ラヴェルの溢れる色彩感と、第2楽章でのフランス音楽独特の浮遊感の中にほとばしる情熱、そしてめくるめく楽想をわくわくしながら追いかけた第3楽章が終わった時には、チューリヒ歌劇場が遊園地のような興奮に包まれた。

ディアギレフ音楽祭を仕切っているクルレンツィス以上に、ディアギレフがストラヴィンスキーに委嘱した《火の鳥》の意義を肌で感じられる指揮者はいないと期待して最後の曲に臨んだが、ロシアの音ではないものの、各楽器を最適な音量と音色で慎重に歌わせ、「静」の多用により音楽的頂点を際立たせた見事な音楽作りであった。このオーケストラがこんなに個性的な主役になるのを聴いたのは初めてだった。 (中 東生)